

清武地域の文化遺産 (清武地域自治区管内)

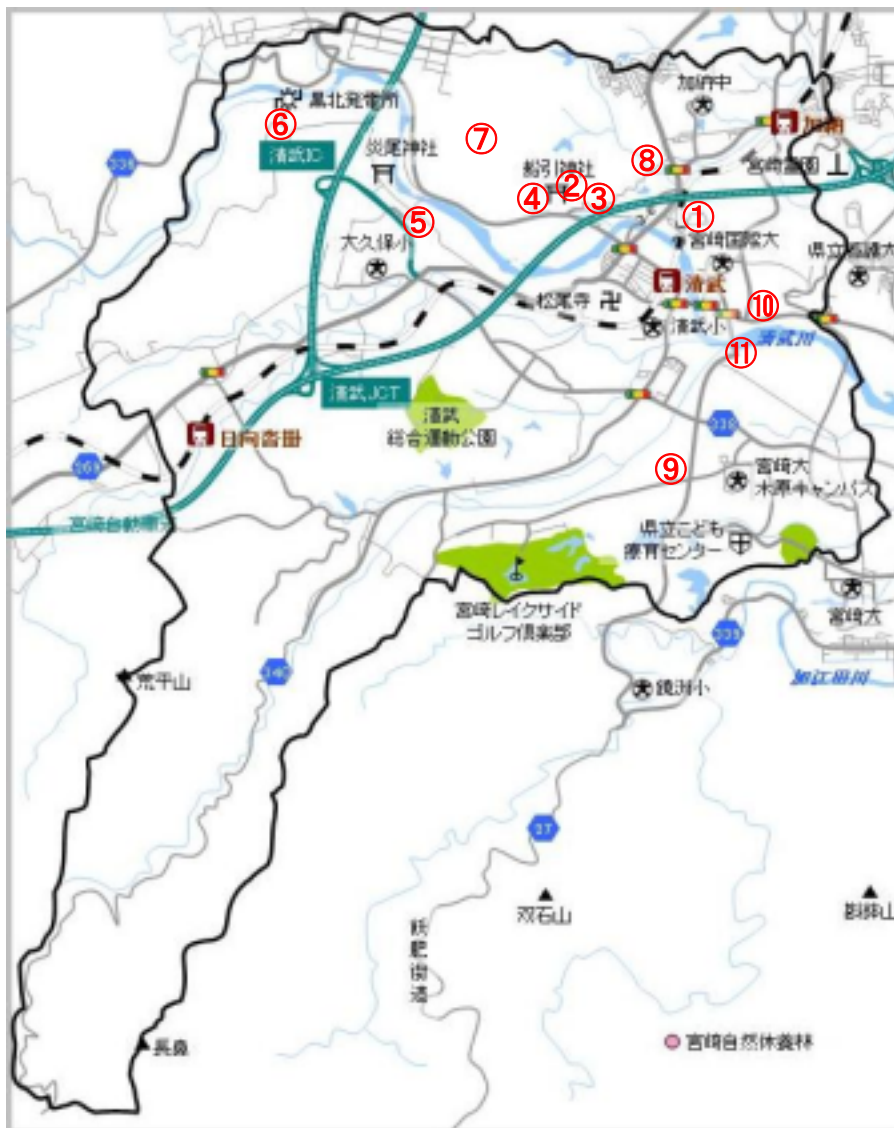
【地域の歴史と特色】

清武地域は、宮崎平野の南西部に位置し、南部に荒平山をはじめとする鰐塚山地が連なり、鰐塚山を水源とする清武川が町の中心部を東流しています。

「日向国凶田帳」（島津家文書）には、八条女院領国富庄一円庄内に「加納二百丁」「今泉三十丁」、弥勒寺領として「船引五十丁」と見えます。15世紀には、伊東氏と島津氏の勢力が拮抗する場となりましたが、次第に伊東氏が勢力を拡大し、文安5年（1448）に伊東祐堯が清武城を奪ってからは、島津氏に対抗する拠点の一つとなりました。

近世には、飢肥藩領となり、清武郷（旧清武町、旧田野町、および旧宮崎市南部）を支配するための地頭所が置かれました。

【文化遺産マップ】



中野地区

きよたけこうなかの

① 清武郷中野

飢肥藩では、領内各地に地頭を配置して藩内を統治しましたが、清武郷（清武・田野・赤江・木花・青島の範囲）の地頭は諸地頭を統括する立場として位置づけられ、家老にも匹敵する家格とされました。このため、清武郷の中心地である中野には地頭所が置かれ、周囲には武家屋敷が建ち並びました。

安井息軒の父滄洲の時代になると、清武郷では学風改善の機運が生まれ、文政10年（1827）に清武学問所「明教堂」が建設されました。その名の由来は、息軒が子供の頃に学んだ中山寺の明教和尚の名にちなんで名づけられたとされています。

📷 みやざきしやすいそっけんきねんかん 宮崎市安井息軒記念館

清武の歴史学習の拠点として、平成14年に中野の地、「郷校明教堂」があった場所のすぐ隣に建てられました。安井息軒に関する資料を中心に、清武郷の歴史や考古資料の展示を行っています。

館内には「安井文庫29点」「安井息軒衣服18点」「安井息軒書簡」「炎尾権現御本地文書」「秋葉大権現」などの市指定有形文化財も収蔵しています。

安井文庫は、昭和10年（1935）の昭和天皇の行幸を記念して創設されたもので、当初は、安井息軒旧宅に隣接して設置されていました。この文庫には、安井息軒及び父滄洲自筆の遺稿や書籍のほか、郷校明教堂の棟木、息軒遺稿の版木なども納められています。



📷 やすいそっけんきゅうたく 安井息軒旧宅（国史跡）

安井息軒は幼名を順作、字を仲平といい寛政11年（1799）中野に生まれました。父滄洲のもと幼いころから学問に励み、のちに遊学し昌平坂学問所や松崎塾などで学問を積みました。28歳で帰郷し、郷校明教堂や藩校振徳堂で教鞭をとりましたが、40歳で江戸に私塾三計塾を開き、多くの弟子を育てました。文久2年（1862）には、幕府の儒官となるなど、江戸時代を代表する大儒学者として知られています。

宮崎市安井息軒記念館の道路を隔てた向かいに、その生家があり、天保2年（1831）に飢肥城下へ転居するまで、安井家が居住していました。敷地は約600坪、約29坪の茅葺き平屋建ての家屋で、昭和54年に国の史跡に指定され、現在も公開されています。



いとうけきょうぼ
📷 伊東家僑墓（市史跡）

中野神社の東側にあります。初代伊東祐兵から12代祐丕に至る歴代飢肥藩主の僑墓です。僑墓とは仮の墓のことで、江戸時代、清武郷の武士たちが盆・彼岸・正月の藩主の墓参りに行くのに、飢肥では遠いので、この僑墓を建て参拝し、忠誠を誓ったといわれています。



れきだいやすいけぼち
📷 歴代安井家墓地（市史跡）

家伝によれば、安井家は奥州出羽の安倍氏に端を発し、その後上野国（群馬県）安井村を領したことから安井姓を名乗ったとされています。南北朝時代に九州に下向した畠山氏に従って日向国に移り住み、その後伊東家に仕えるようになりました。

安井家は代々軍学に精通し、息軒の四代前の安井朝宣の時に、飢肥から清武へ派遣され、藩士に兵学を教授しました。安井家墓地には、朝宣とその妻、その子朝中とその妻、その子朝長とその妻、楚也（息軒の母）、朝淳（息軒の兄）とその娘、圭三郎（息軒の孫養子）、恭一（息軒の曾孫の子）など、朝宣から恭一に至る9代の墓があります。



船引地区

ふなひきじんじや
② 船引神社

社伝によれば、寛治元年（1087）の創建で、当初は正八幡宮、または八幡宮と称したと言われています。弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には「舟引八幡領」とあり、社領として「舟引上分」「同所下分」「木原」「大津か（大塚）」の内に田数2町6反と屋敷1ヶ所が記されています。

現在の社殿は、拝殿は嘉永3年（1850）に、本殿は嘉永6年（1853）に再興されたもので、明治14年（1881）には拝殿が瓦葺となっています。

船引神社には、作祈禱神楽と呼ばれる春神楽が伝承されており、春の社日には境内で奉納されています。



民俗芸能 船引神楽(県無形民俗文化財) ➡

ふなひきじんじゃうりゅうまきばしら
📷 船引神社雲竜巻柱（市有形文化財）

船引神社本殿の向拝柱には、雲の中を泳ぐ竜が浮き彫りにされた姿が見られます。柱の高さは2m35cm、幅は25～30cmで、嘉永6年（1853）11月吉日の日付と、宮崎本郷北方の大工川崎伝蔵の墨書が残されています。

この種の雲竜巻柱は、県内では、県北の延岡藩領と県央から県西にかけての薩摩藩領・幕府領に多く見られ、栗野神社（現宮崎市高岡町）や本庄八幡神社（現国富町）などに例を見ます。



きよたけのおおくす
📷 清武の大クス（国天然記念物）

船引神社の境内にあり、祭神八幡大神にちなんで、別名「八幡楠」とも呼ばれています。根周り18m、幹周り13.2m、高さは26mあり、内部は地上8mくらいまでが空洞で、その底は8畳ほどの広さになっています。樹齢は900年を超えるとも言われる県下最大級のクスノキです。



ふなひきじんじゃのやっこそう
📷 船引神社のヤッコソウ（市天然記念物）

ヤッコソウは、シイの木の根に群で生える寄生植物で、高さは約5～7cmほどになります。鱗片葉が十字形に対生した外観が「奴（やっこ）」に似るためヤッコソウと呼ばれています。発生するのは秋で、船引神社においては11月中頃が見頃となります。沖縄から九州、四国の南部のみに分布する極めて珍しい植物で、市指定天然記念物であるほか、絶滅危惧種としてレッドデータブックにも掲載されています。



みろくじろくじそうとう

③ 弥勒寺六地藏塔（市有形文化財）

清武町船引地区は、「日向国図田帳」には弥勒寺領「船曳五十丁」とあり、古代から中世にかけて豊前国宇佐八幡宮の神宮寺として建立された弥勒寺の荘園として支配されました。中世以前には、この地にも弥勒寺という寺院があったようで、平部嶠南の著した『日向地誌』には、「船引神社の北一町許ニアリ」と記されています。

現在、この六地藏塔は、船引神社の東方150mの水田の片隅にあります。高さ90cmの台石の上に、高さ35cm、直径35cmの龕部があり、その上に厚み13cm、直径67cmの扁平の石が笠として載せられています。台石に文字が書かれていたとありますが、現在では判読できない状態で『日向の金石文』（昭和17年、宮崎県発行）では、この年号を「□□□八年辛巳」とし、永正18年（1521）に比定しています。

地藏は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道の姿となり、一切の衆生を救おうとした願いをこめて建立されたものです。



じんぐうじろくじそうとう

④ 神宮寺六地藏塔（市有形文化財）

船引神社の西方50mの市道沿いにあり、神宮寺にまつわる六地藏塔として伝えられています。神宮寺は、中世以前にこの地にあった寺院で、平部嶠南の著した『日向地誌』には、「弥勒寺の西四十間許ニアリ」と記されています。

この六地藏塔は、六角形の基礎の上に、八角形の幢身、六角形の笠より成る単制形式で、幢身の像の下には永禄12年（1569）2月の年号が刻まれています。



うちやまでらにおうそう

⑤ 内山寺仁王像（市有形文化財）

内山寺参道の石段を登りつめたところにあります。飢肥藩清武郷今江村（現宮崎市木崎）出身の禅僧であった仏師の平賀快然が彫刻したもので、銘には延享2年（1745）6月に、大久保の祇園山大仙寺の住職功厳恵勲が願主となり、実父母にあたる成合厳右衛門・明春夫妻の菩提を弔うために建立したことが刻まれています。



くろきたはつでんしょ

⑥ 黒北発電所（国登録有形文化財）

明治40年（1907）に、大和田伝蔵氏ほか県内有志で設立した「日向水力電気株式会社」により建設された、県内最初（九州でも2番目）の発電所です。

建物の外壁は、近隣で採取される「清武石」を使用し、アーチ型で縦長の採光窓が特徴的で、明治時代末のモダンな建築となっています。内部には、ドイツ製の水車と発電機があり、清武川の水を使って、100年の時を越えた今もお力強く動き続けています。現在稼働している発電所としては国内最古級となります。敷地内には、明治44年に同社が建立した記功碑があります。



きよたけかみいのはるいせき

⑦ 清武上猪原遺跡（県史跡）

船引地区の清武川左岸のシラス台地上に立地し、旧石器時代から近世までの複合遺跡です。これまで5箇所で行った調査で、調査面積は約36,000㎡に及びます。中でも、縄文時代早期の資料は膨大で、集石遺構389基、炉穴75基、陥し穴状遺構25基が検出されています。

また、平成17年度から21年度にかけて行われた第5地区の調査では、縄文時代草創期の竪穴住居跡14棟と大量の遺物が発見され、全国最大級の縄文時代草創期の集落遺跡として高く評価されています。現在、遺跡の一部を県の史跡とし保存しています。



城内地区

きよたけじょうし

⑧ 清武城址（市史跡）

清武川左岸の丘陵上に立地し、広さは南北380m、東西320mになります。築城の時期ははっきりしませんが、延文6年（1361、北朝年号）の「一色範親感状」（土持文書）には、すでにその名が見えます。清武城は、応永4年（1397）に島津氏によって攻められ、伊東・島津の攻防の端緒ともなりました。

文明17年（1485）には、伊東氏の飢肥攻めの際、後詰として入城した伊東祐堯が、この城で没しています。その後も伊東氏の拠点城郭として、伊東48城の一つとなっています。

伊東氏の没落後は島津方の城となりますが、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州征伐後、伊東家が再興されてからは、稲津掃部助などが城主となりましたが、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となりました。



いなづかもんのすけのはか
📷 稲津掃部助の墓（市史跡）

稲津掃部助は、伊東祐兵の家臣で清武城主となった人物です。関ヶ原の戦いに際し、西軍側の高橋元種の家臣榎藤種盛が守る宮崎城を攻め落としましたが、高橋元種が東軍に寝返っていたことから、宮崎城は高橋氏に返還されました。

慶長7年(1602)、掃部助は宮崎城を攻撃した責任を取らされ、清武城内で自刃しました。この墓は、掃部助の霊を弔うために建てられましたが、藩船への崇りを恐れて海とは反対の西向きにしたと言われます。



木原地区

くろさかかんのん
⑨ 黒坂観音

くろさかかんのんにおうそう
📷 黒坂観音仁王像（市有形文化財）

もともとは長徳山勢田寺の山門として建立されたもので、現在は黒坂観音堂の入口正面に安置されています。明治初めに勢田寺が廃寺となった後も仁王像はそのまま残されていましたが、大正10年（1921）に現在地に移されました。

作者は内山寺仁王像と同じ平賀快然で、当時の勢田寺住職であった快庵の代に、木原郷中の寄進によって建てられたものです。高さ1m95cm、横幅1m、奥行45cmで、銘文は不明瞭となっていますが、一説には、宝暦3年（1753）建立とも伝えられています。



せんじゅかんのんじざいぼさつ
📷 千手観音自在菩薩（市有形文化財）

もともとは長徳山勢田寺に祀られていましたが、明治初期の廃仏毀釈に際して、黒坂観音として現在地に移されたものです。像の高さは97cm、寄木造の立像で、鎌倉時代の特徴を残しています。



やまうちせきとうぐん
📷 山内石塔群（市史跡）

昭和57年に宮崎学園都市から現在地に移設されました。

五輪塔約450基、板碑約80基が確認され、数基単位で五輪塔を建立した場所や「コ」の字形で五輪塔や板碑を並べた場所など、特徴的な配置も幾つか見られました。紀年銘がある石塔で最も古いものは応永25年（1418）ですが、さらに古い特徴を持つ五輪塔が存在することから、この石塔群の建立時期は、鎌倉時代末期から江戸時代初期の約300年間に及ぶものと考えられています。



まついいげき
⑩ 松井井堰

松井用水へ水を取り入れるための井堰です。松井用水は、清武郷8ヶ村の水不足を解消するために、飢肥藩士の松井五郎兵衛が主導して開削したもので、寛永16年（1639）年12月に起工、翌3月に完成しました。

この用水路工事は、計画地に丘があり、そこを貫通させるための深さ10m、長さ500mにわたる掘削を必要とした難工事であったそうです。井堰は、上使橋の下流側にあり、近くには堰堤改良記念碑が建っています。

じょうしばし
⑪ 上使橋

清武川中流、木原にある飢肥街道の渡しです。日向地誌には「上使橋渡」とあり、普段は徒歩や船で渡っているが、幕府の巡検使が通るときには必ず板橋を架けたため地名となったと記されています。

初めて上使橋が架けられたのは、昭和4年（1929年）のことですが、木製であったため幾度かにわたり台風などで流されていました。現在の永久橋となったのは、昭和42年（1967）のことです。

